

## 千草ホテル 中庭プロジェクト

これまで美術家の発表の舞台といえば、ホワイトキューブと呼ばれる展示空間が主でした。ホワイトキューブの直訳は「白い箱」で、美術館やギャラリーなどの白い壁に囲まれた展示スペースを指し、日常生活から切り離された独立した空間として考えられています。作者も鑑賞者も美術に専念できるよう、展示や鑑賞の妨げになるものはできる限り排除されます。

それに対して、ホワイトキューブ以外で展示がなされる場合、日常生活と作品世界との線引きは曖昧なものになります。舞台はすでに様々なモノや色に囲まれており、そこに足を運ぶ人も美術鑑賞を目的とする人ばかりではありません。そこでの美術家の営みは、いわばお題を与えられた落語家のようなものとなります。

千草ホテル（八幡東区）で開いている「中庭プロジェクト」では「アート・ホスピタリティ」をテーマに

## アートの現場から

キュレーター  
花田 伸一



写真1 草野貴世展（全体）



写真2 草野貴世展（部分）

美術家がそれぞれ想像力を働かせ、ホテルの中庭を舞台に作品を展示していきます。中庭の空間をどう使うか。そして、隣接するカフェとどう関わりを持たせるか。これらは美術家の想像力と手腕が問われます。以下に紹介する二人の作例は、いずれも「室内から中庭を見る」という前提を最大限に活かして行われた展示です。

### 草野貴世展

草野貴世氏の展示は複数の要素の組み合わせで構成され、全体では「内」と外との繋がりを意識させる」というテーマを持っていきます。写真1。草野氏はまず内と外とを区切る大きなガラス窓に注目しました。ガラスは向こうの光を通す点では透明な存在ですが、物質を通さない点では不透明な存在です。そのガラスを意

# 草野氏内・外の繋がりがり意識させる展示

に、古びた椅子や白いカバーを被った椅子たちが中庭に置かれました。そのいくつかにはオブジェや写真が載っています。カフェで使われているグラスと同じものが載っていたり、ホテルの近隣の風景写真が載っていたりと、いずれも内と外との繋がりがある物が選ばれています。室内のカフェにいながら中庭に目をやると、室内と室外の繋がりが、あるいは中庭と近隣との繋がりが視覚的に示され、室内から室外へと意識が導かれます。その境界であるガラ

識させるべく、ガラス窓に沿って瞼の形をした小さなオブジェを吊り下げました。遠くから見ると、リズムミカルに音符が並んでいるようにも見えます。また、自然界の小さな種や葉などがガラス窓に貼られ、外光を通じてその形と色の美しさが浮かび上がります。写真2。さらに室内の椅子と対をなすよう

スに、自然界の小さくも美しい造形が浮かび上がりつつ、人間の視覚の境界である眼が並置されているという構成で、全体として内と外が入り状態となって複合的に結びつきあっています。

草野氏の展示では空間的な内と外とが視覚的に示されていますが、そこにホスピタリティに絡めつつ私（筆者）の解釈を加えるならば、その内と外の入り状態を私たちの意識に当てはめて考えてみることでできると考えてみます。例えば、私たちは常



写真3 三輪恭子展 (全体)

に何らかの集団に所属しながら日々生活していますが、そのメンバーが意識を常に内側にのみ留めているのであれば、その活動はすぐに硬化化するでしょう。ホスピタリティを失わない柔軟な集団であるためには、

時には内と外との立場を入れ替えて考えてみることで、そして、内と外を区切る境界がどのような形で存在しているかについて注意深く関心を払うことが必要です。

### 三輪恭子展「密やかな結晶」

三輪恭子氏の展示はシンプルなパーツの並列という形で構成されています。写真3。

そのコンセプトは、自然の光や風などを手触り感をもたらしながら目に見えるようにするというもので、各パーツは具体的には、地面に鏡とレンズを重ねて置き、その上に紙をかざした形となっています。針金で固定されただけの紙がゆらゆらと揺れることで、カフェの中から「風」が見えます。さらにカフェの中からは

## 三輪氏 光や風の様子で表情が変わる展示

によって、レンズを通して紙に映りこみます。その紙は乳白色で不透明な材質なので、映画やテレビのようにクリアな映像ではなく、淡い映像と紙の材質感とが組み合わせ、独特な雰囲気があります。写真4。

風の状況も光の状況も自然界の時間の流れに沿って常に変化します。で、本展は常に違う表情を見せません。一定の条件下で変わらず作品を見せ続けるならばホワイトキューブこそが理想空間なのです。しかし、屋外展示の本展では、むしろ自然の変化もふまえて制作・鑑賞をすることが優先的に考えられています。

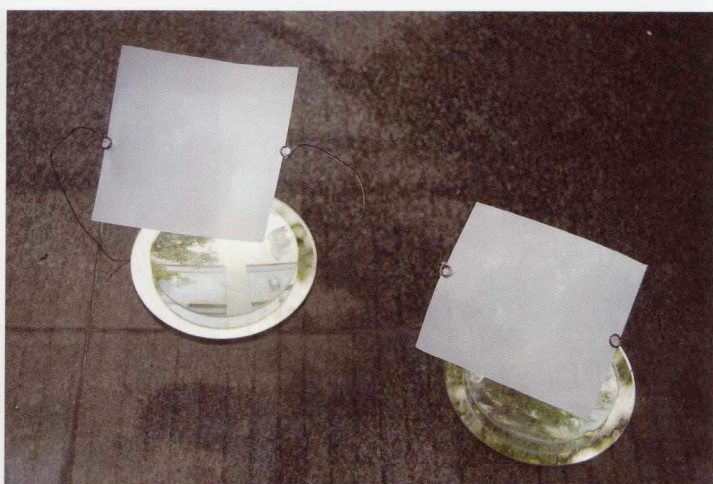


写真4 三輪恭子展 (部分)

### 美術家の想像力

ここで紹介した二人の展示は、中庭の初期条件を巧みに取り入れながら作品を構成しています。しかも二人には、目の前に見えていない物事に思いを馳せ、そこに何らかの形と価値を与えようとする姿勢が共通しています。ホワイトキューブ以外の展示ではホワイトキューブ以上に視点を換える作業、つまり発想の転換が求められます。そこで美術家の頭が固ければ致命的です。

先に美術家の営みを落語家に例えましたが、実は両者は「発想の転換」が求められるという点で共通しています。美術家や落語家でなくとも、自分の目に見えている世界にのみ執着することは、物事の解釈の多様性を失うことであり、好ましいことではないでしょう。視点を換えてみることで、想像力を養うことは、社会の柔軟性を保つ上でも重要な作業の要諦です。

感性を磨くばかりが美術鑑賞ではありません。視点を換えるコツを掴むトレーニングという側面もあるように思います。